



トルコギキョウ斑点病の発生生態と防除対策

福岡県農林業総合試験場 病害虫部 なり成 やま山 ひで秀 き樹

はじめに

トルコギキョウ斑点病は、2008年に国内で初めて発生が確認された病害である。このときは、すぐに発生が終息したものの、2016年以降に複数の県で発生が見られるようになった。発生県は拡大中であり、産地、行政、普及機関から早急な対策の確立が求められている。近年問題となった病害であるため、知見が少なく、登録農薬もないが、現時点で判明している本病の発生生態と防除対策について紹介したい。

I 本病の発生経緯

2008年6月、福岡県北部のトルコギキョウ圃場において育苗中のセル苗葉部に、5~10 mm程度の退緑斑が発生した。退緑斑部分には灰褐色のすすかび状菌体が形成され、やがて葉枯れを生じた。病斑部から分生胞子を分離し、それを接種源として培養し、培地上に形成させた分生胞子をトルコギキョウ新葉に接種したところ、病徴が再現され、病斑から菌が再分離された。

病徴および形態的特徴から、病原菌は *Pseudocercospora eustomatis* (2009年に *P. nepheloides* と変更 (BRAUN et al., 2009)) と同定され、我が国で未報告の病害として、トルコギキョウ斑点病の名が提案された (石井ら, 2011)。なお、他国ではアルゼンチン、米国、ドミニカ共和国で発生が報告されている。

翌2009年に発生は終息し、その後当該発生地域で再発は認められなかった。また、他の都道府県においても、同病害の発生に関する情報はなかった。しかし、2016年になって福岡県内の複数の地域で発生が確認され、2017年1月6日付で病害虫発生予察特殊報が発出されたのを皮切りに、2018年6月までに長崎、高知、大分、熊本、宮崎、和歌山、沖縄、広島と、九州を中心とする9県で、相次いで発生が確認された。近年突発的に複数の県で発生した原因は不明である。なお、福岡県内の生

産者の話では、斑点病と思われる症状は2013~14年ごろから散見されていたようである。

II 発生生態

本病は、糸状菌 *P. nepheloides* による病害で、現在確認されている宿主はトルコギキョウのみである。病徴は、まず下位葉に5~10 mm程度の退緑斑 (図-1) が発生し、上位葉に伸展する。この退緑斑上には、その後、黒褐色ないし灰褐色のすす状の分生胞子が葉の表、裏、両方に形成され、商品価値を大きく下げることになる (図-2, 3)。病勢がさらに進展すると葉は枯死する (図-4)。分生胞子は、 $20\sim 60 \times 3.2\sim 5.2 \mu\text{m}$ の大きさで、0~6の隔壁を有し、淡オリーブ色で倒棍棒状である (図-5)。

培地上での菌の生育適温は25℃前後で、夏季の高温・乾燥期の発病は非常に少ない。しかし、菌は死滅するわけではなく、好適な条件になると再度発病する。接種試験において、30日以上潜伏期間を経て発病した事例もあり、生育に不適な条件においては、菌は長期に無病徴で宿主に潜伏する可能性があると考えられる。

本病は、盛夏を除き、ほぼ年間を通して発生するが、特に春から秋の多湿条件下で多発する。また、育苗期からの発生も確認されている。育苗期から発生している圃場は、前作で多発し、育苗施設周辺に罹病残渣を放置している圃場が多く、施設の資材や罹病残渣に生残してい



図-1 葉に生じた退緑斑

The Occurrence of Leaf Spot of *Eustoma grandiflorum* and Its Control. By Hideki NARIYAMA

(キーワード: トルコギキョウ斑点病, 発生生態, 防除対策)